

第64回 小中高校生の吃音のつどい(サマーキャンプ)

8月9日(土)～10日(日)、山中湖畔民宿野ふじ苑にて開催。小学生9名、中学生4名、高校生6名、兄弟姉妹3名、ご両親14名、スタッフ19名の計55名が参加。夜のミニレクチャーでは、「**論理療法**」の論駁を、グループごとに皆で考えた後、発表しました。また小学生&兄弟姉妹グループでは、キャンプ初めて、演劇に取り組み、『冒険者たち ガンバと15ひきの仲間(斎藤惇夫作)』を、2日目に発表することができました。

高校生グループを担当し、キャンプを通して、高校生の豊かな感性に触れることができ、私自身、新たな価値観を見出すことができたことを嬉しく思います。そして、つどいの力というものを改めて実感しました。過去に吃音で辛い経験をしてしまったために、次の一步を踏み出すのに躊躇している人(しかし、今は踏み出すことができた)。吃音が原因で人生を方向転換せざるを得なかった人。私は初対面であるため、強固な信頼関係が構築されていない中、どのように声を掛けて良いのかと困惑した2日間でした。彼らに対してできたことは、私自身の吃音に対する経験を話す程度であり、吃音についてのアドバイスはほとんどと言って良い程できませんでした。しかし、このスタッフの体験談というものがつどいのかけがえのない財産であり、自身の吃音体験を今後も伝えることに専念していこうと思います。

高校生達と真摯に向き合うことのできた2日間であったと思います。別れ際、私に「次回のつどいでもまた会いましょう」「本当に楽しい2日間だった」「次回も高校生グループを担当してくれ」などと言ってくださいました。これらの言葉は、スタッフにとって非常に感慨深いものであり、次回への糧となる言葉です。台風直撃の中のキャンプで、スケジュールを変更する作業などで大変ではありましたが、無事成功させることができたことを嬉しく思っております。本当にありがとうございました。中高生達がキャンプで書いた作文などを紹介します。(リーダー:小口貴宏、**斎藤新**、菅原慧)

MIさん(中1女子)「吃音」

私は吃音と共に生活しています。吃音を持っていることで、中高校生の吃音のつどいという、吃音をもった小中高生が吃音についてそれぞれの体験を通して感じた事、思った事を話し合ったり、吃音を学ぶ集まりに参加しています。毎年、夏に行われているサマーキャンプで、私は自分のある変化に気付きました。それは吃音に対してのとらえ方です。今までの私は吃音は邪魔なものだと思い込んでいましたが、本当は違っていました。**吃音とは自分を成長させてくれる神様からのプレゼント**だったのです。

その答えにたどりつくきっかけとなったのが、小学校から中学校へと進級し環境が変化した事でした。小学生の頃は、私が話すクラスの人達がクスクス笑いながら真似されたり、「お前障害者なのになんでこのクラスにいるの」とハッキリ言われ、誰にも気付かれないように静かに泣いていました。このような事があり、毎日悩みながら学校生活を送って

いました。七夕の短ざくには吃音が無くなりますようにと書き、寝ないでお願いしていた事を今でも鮮明に覚えています。

私の中で吃音の事で一番悩んでいた時期は小学5年生頃だったと思います。担任の先生が、吃音をもっている先生でした。集会で担任の先生が話す時があります。その時に吃音が出てしまうと、後でクラスの一部の人達が「先生めっちゃ変な話し方してたよねー」と笑って話しているのをよく見かけました。私はそれを聞いて「わざとじゃないんだからそうやって言うのはやめなよ」と注意しました。しかし、先生の話し方をバカにする人達は私の注意を、サラッと流してまた先生の話し方をバカにし出しました。バカにしているのが聞こえてくると、自分の吃音の事を直接言われているみたいでとても怖かったです。この時期の私にとって吃音は重い荷物でした。

中学生になると自分の吃音の事をからかう人がいなくなりました。この環境の変化により今までの吃音へのイメージが、180度変わりました。周りの

人からからかわれなくなった事で、自分の話し方を悪い方向に考える必要が無くなります。

もし、私が吃音者ではなかったら、自分の事について深く考えることはなかったでしょう。自分の事を深く考えることによって、良い点と悪い点が見えてきます。良い点と悪い点が見えると、良い点はそのまま伸ばしていき、悪い点は反省し解決策を見つけた事ができます。私は、吃音というプレゼントをもらったおかげで大いに成長できたと思います。

今は、吃音の事で悩む事はないけれど、これから色々な人と出会ってまた悩む時が来るかもしれません。その時は、あまり気にしないでポジティブに考えようと思います。これが私の吃音に対しての答えです。

※夏休みの課題で、中学校の学年代表に選ばれ、さいたま市のコンクールに出ているそうです！

【感想↓】

T.S さん(高2男子)

吃音をプレゼントと言っていた所がすごく心に残りました。吃音がきっかけで成長できたのはすごく大きいことだと思います!! いつまでもその気持ちを忘れないで下さい。

M.S さん(中2女子さんのお母さん)

とてもしっかりとした作文ですね。自分をしっかりと見つめなおすことができていて、成長してるなあと感じました。(私は低学年の時にしかお会いしていませんが…) 自分の考えを文章にできるということはとてもうらやましいです。お会いできる日がとても楽しみです。

A.K さん(小2男子のお母さん)

『吃音はギフト』

4人の子供達に囲まれている母。

4人分の愛情表現に、リクエスト対応に、躰に、おしゃべり相手にと、大忙し。

そこで、吃音クンは、VIP 対応である。4人一斉に話しかけてきても、『まず、キミの話からね』

抱っこしたり、頬ずりしたり、手を繋いだりもその他大勢より確実に 50%増。

キミの得意なこと、好きなこと、やってみたいことへのチャレンジには、吃音の子を持つ母、何よりも

パワー、応援、時間を惜しまない。

母としても、振る舞い、言葉遣い、所作、意識が高まるわ、反省盛り沢山、進化しない訳がないのである。

キミと2人だけの時間も作りやすいよね。週1の通級に、集いのサマーキャンプ。キミだけを見ていられて、君だけに注目してられる時間は、まさに、ギフトだね。どもっていてくれて、ありがと。

『吃音をからかわれたら、こう言い返そう。』

兄弟会議の巻』

《そのⅠ》

姉「久々にやってみよう。じゃ、私が意地悪な友達役ね」

キミ「いいね！この前もことばときこえの教室で練習したしね！」

姉「ねえねえ、どうして、あ、あ、あってなっちゃうの？」

キミ「(キーって睨みながら、ず太い声で)悪い?!?!」

姉「ごめん…って言うしかないね。」

《そのⅡ》

弟「今度は、僕がやる！」

キミ「じゃ、僕が意地悪役ね、ねえねえ、キミ、どうして、あ、あ、あってなっちゃうの？」

弟「(小島よしお風に)そんなのカンケーね～そんなのカンケーね～!!」

キミ「最強だね！」

《そのⅢ》

姉「もうひとつ思いついた!!アナ雪バージョンやってみるよ」

キミ「どうして、あ、あ、あってなっちゃうの？」

姉「(クリストフのセリフを真似て)その話はもうやめてくれないか？」

キミ「新しいね！」

♥弟の吃音問題に協力的なお姉さんの存在は実に頼もしいですね。家族で、息子さんの吃音の問題に取り組み、共に考えることができる…。いろんな気付き・結び付きが得られる。これもギフトでしょう。

S.N さん(高2女子)

吃音との付き合いはかれこれ 10 年以上にも及ぶ。今まで過ごしてきた日々で吃音を意識しなかった事は1日たりとも無いだろう。それ位、吃音は私にとって十字架の様なものだった。友人や家族との何気ない会話、学校の授業での音読やスピーチ、外出先で道を尋ねたい時。誰もが何の疑問を抱く事のない「話す」という動作に、人より何倍も時間を掛ける自分に嫌気がさした事もあった。高校に進学しても変わる事がなく、全く新しい環境の中で悶々と過ごす毎日であった。

転機が訪れたのは高校1年の12月。「生徒会に入らないか」と先生に打診された時だった。その時の私は学校に馴染めたものの、未だに吃音を強く意識しており、人前で話したり、会議で発言する事も多い生徒会に入る気はさらさら無く、度重なる先生の打診を断り続けていた。吃音の有っても無くても生徒会などという大仕事は自分には無理だと最初から決めていたのかもしれない。しかし、仕事自体には興味を持ち始めた。友人も多く、みんなで仕事ができるのなら悪くはないか、とも思っていた。それでも吃音の十字架を降ろす事はできず、なおも断り続けていた。

ある時、生徒会担当の先生が「本音を聞かせて欲しい」と教室に呼んだ。そこで私は「仕事自体に興味があるが、吃音のある私が最後まで務める事ができるかが不安だ」という思いをぶつけてみた。

先生はその言葉を聞いて少し考えた後、口を開いた。「仁科さんに吃音があるのは承知でお願いしてきた。うまく話せないからといって、劣等感を持つ必要は無い。吃音の有っても仕事をこなす実力があると教師一同で判断している。吃音の有無で人を測るなんてことはしないよ」と。大体こんな事を言っただろう。

この言葉を聞いて、背中がスツと軽くなったのを感じている。吃音の有っても責任の有る仕事を任せてくれる。何度も迎え入れようとしてくれている。その言葉が大きな自信となり、生徒会に入る事を決めた。今は悪戦苦闘しつつ、友人達と仕事に励んでいる。吃音を盾にしてやりたい事から逃げたくない。吃音の有っても評価してくれる人はたく

さんいて、責任の有る仕事を任せてもらえる。吃音の有無で人を測る人もいればそうでない人もいる。何はともあれ、軽くなった背中を伸ばし、「吃音の有るから…」と卑屈になる事は無く、自信を持って過ごしていきたいと思う。

K.O さん(高2男子)

高2にもなってくると、大勢の前で色々話したりすることが多くなってきました。例えば、部活では、首脳部として保護者会の時に親の前で話をしたり、文化祭や体育祭の役職を決める選挙でも、みんなの前で一人で演説をしました。話し始める何分か前までは落ち着いているのですが、直前になるとやはり緊張してしまいます。しかし、徐々に落ち着いている心を保つ術が分かってきて、まあ結局は緊張してしまうのですが、しかし徐々に緊張し始めてから話し始める時間が短くなってきたと感じます。いずれは緊張しないで話し始めるようになると思います。と言うか、なりたいです。

話し始めてからはつかえてばっかだし、話したいことも言えないしで、散々です。最初は皆の前に出て話すことが嫌でした。皆が吃音を笑っているのではないかとかばかり気にしていました。前にどこかで、「完璧な人間はいない」という言葉を聞いたのを覚えています。つまり、人にはどこか必ず短所があるということです。吃音は短所じゃないと言う人もいるかもしれませんが、正直僕にとっては短所です。色々と話さなければいけない職についているので、思ったことを伝えられないのは辛いし、人を円滑に動かすにはいちいちどもってはいけません。しかし、今になってきて分かったことですが、**案外皆は吃音のことは気にしていません。**僕が勝手にそう思っていただけなのです。あるいは気にしてはいるかもしれませんが、口に出さない、つまり受け入れられているのです。

このようなことは、しょせん僕が思っていることなので、どうでもいいのですが、こういうことで僕のメンタルは保たれているのだと思います。辛いこととかあっても、このようなことを考えると楽に乗り越えられます。これは吃音以外にも言えることだと思います。

ます。そして、このようなことを考えられるようになったのは、皆の前で話したりとか、そういう自分
があまり好きでないことをたくさん経験したからだ
と思っています。これも結局はメンタルを保つため
に僕が心に思っていることなのですが、いろんなこ
とに挑戦したらいいと思います。

きら はる き
吉良 日希 (小学生 G スタッフ)

皆さんきっと同じような気持ちだったと思います
が、やはりサマキャンはとても楽しみでした。そして
2 日間過ごしてみても、やはり充実していました。こ
れが率直な感想です。

小学生の子供達と多くの時間を過ごした訳です
が、やはり前向きで明るく、話すことについて抵抗
感が無い。いや話したいことを話し、話すことが大
好きな小学生がとても輝いて見えました。

ミニレクチャーでは、皆さんそれぞれ感じたこと
を話し合い発表しましたが、その中で小学生の子
供達が前に出て発表する姿を見て、あのような前
向きな姿勢がこれからの人生において、とても大事
になってくるだろうと改めて感じました。

さて、今回の小学生グループのメインとなった演
劇は、みんなで練習をするところから大変で
した。というのも、やんちゃな子もいて、勝手に別の
部屋に遊びに行ったりしていたので、一体感を持
って練習することに困難を感じました。その中で小
俣さんが、いけないことについては、はっきり伝え
たり、上手くまとめていた姿を見て、特に私も含め
若いスタッフの方々は見習うべきだと感じました。

しかし、やんちゃな小学生ではありますが、あれ
くらいの元気があってパワフルな方が私は良いと
思いました。やんちゃではあるけれど、明るく前向
きな性格はとても良いと思います。特に K 君(小4
男子)とずっと一緒にいましたが、やんちゃではあ
りますが、吃音のことにしてもしっかき考えて、し
っかき自分の意見を持っていて且つ堂々と話す面
(下記論駁参照)も発見でき、これから明るい K 君
がどういう風に成長していくか楽しみです。

本当にスタッフを始めて良かったなと思えまし
た。

**演習番号24.「私には吃音があるので、大目にみ
て欲しい」**に対しての論駁

;吃音を何か悪いこと? やった際の言い訳に使っ
ちゃだめ。吃音だから、仕方なかったんだ!?…と。
吃音を理由に甘え過ぎてはいけない。また、あまり
叱り過ぎると、どもりがひどくなっちゃうなど、吃音を
かさに使うのもダメ。

唯一、どもる者にとって辛口の、このイラショナル
ビリーフに対しての論駁です。が、入れておいて良
かったですね。

たみ
民 遼祐 (小学生 G スタッフ)

吃音のミニレクチャー「**論理療法**」はとても興味
深い内容。PDCA サイクルみたいに考えれば考える
ほど面白くなっていき、さらに他の人の意見が混
ざってくると楽しくなりました。小学生には難しい内
容? だったかも知れませんが、中高生にはこれから
大人になっていく過程で必要になってくる考え方
だと感じました。

読劇練習 2 回目はリハーサル形式でやりました。
1 日目と違う所は小学生の座席指定をして行いま
した。その結果 1 日目より好き勝手に動き回る量が
減った感じがします。1 日目からは考えられない程
の変わり様でビックリ。これは学校の授業の感じな
んでしょか? これを 1 日目から行っていればより
濃い練習ができた気がします。演劇発表会は少な
い練習時間で小学生が頑張ったと思います。

後記

◆**論理療法**は、超ポジティブシンキング、超プラス
思考との声もありましたが、あっちゃばかりでなく、こ
っちの考え方もちゃんとあるのだ! ということで、知っ
ておいて欲しいというものです。私自身も回り道は
しましたが、実際にこのように生きてきて、今ここに
いるというもの。どうせなら、損ではなく、得な考え
方をしませんかという提案・紹介。私自身、今は特
に、「超」ということばを付けず、むしろこっちで当た
り前でしよう…と考え、普段生活しています。あっち
もこっちも両方、経験した上です。

♥**吃音はギフト** キャンプ最後の一人一言で、初

参加の A.K さんが話してくださったことば。それに反応してか、中学生やスタッフが、自分のこれまでの経験に照らして、作文書いてくださいました。今の素直な気持ち・想いのままにです。

小学生の時は、そのようなことは到底書けなかったということのようですが、今は書くことができる。

神様からのプレゼント…ということばに、今うなずけない…方もいらっしゃるでしょう。たいへんな場合もあるでしょうし。吃音なんか大嫌いという想いしかない…と感じていらっしゃる方もあるでしょう。経験している我々スタッフはそんなお気持ちよく分かります。続けて、つどいにお越しください。

◆**吃音の説明はスパッと！** ご両親グループで、サイコドラマを行い、ご両親の方々に子供達になっていただき、友達に吃音の説明をする場面を経験していただきました。

「それ、僕の個性だから。いいのいいの」、「なぜどもっちゃうのか、わからない！」と、スパッと言い返すこと。そして顔の表情も精一杯使って…演技力発揮してください。ぐずぐず答えていると、しつこくなってしまう。ぱっと返すと、相手もそれ以上追及してこない。そんなことも含めて感じていただけましたでしょうか。

♣**「どもってなかったら、なんだか、私じゃないみたい…」**「吃音は治るはずだし、絶対に治すべきだ」、「私がどもる人間でなかったらなあと思う」に対して、論駁の話し合いをした上での、M.I さんの発表です。グループリーダー N.N さん(小5男子のお父さん)のリードも良かった。お父さんのこのうれしいサポート感が、びりつと畳の間に広がり渡る。全員集中できていました。

(代表 佐藤 隆治)